

古今和歌集巻第一

春哥上

あつと　いふ　ら　よ　や　ら　ら　よ　や　ら

いふ　ら

いふ　ら

乃　と　し　春　と

あ　つ　と　い　ふ　ら

い　ふ　ら

梅原猛

古典の発見

講談社



N. D. C 910 232p 19.4cm

古 典 の 発 見

昭和 48 年 11 月 26 日 第 1 刷発行

昭和 49 年 7 月 20 日 第 4 刷発行

著 者 梅 原 猛

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替東京 3930

印 刷 所 祥文堂印刷所

製 本 所 藤沢製本株式会社

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

© Takeshi Umehara 1973 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります (学1)

古典の発見／目次

古典の発見——序にかえて 5

I 歌の伝統……………21

愛と死の終焉——万葉集について 22

虚構をささえるもの——定家の美意識 43

二つの有心——後鳥羽と定家 56

旅と連句——芭蕉の世界 77

II 内面の発見……………91

すばらしき女たち——王朝女流日記の世界 92

人間観察者の自己矛盾——吉田兼好論 103

死霊のドラマ——能芸論 114

Ⅱ 日本文化観……………143

縦線文化と横線文化——塔と日本文化 144

死の美学——日本人の美意識 152

中世の意味——時代区分の問題 171

芭蕉と宗教——芸術の二つの顔 182

装幀／岩本正雄

扉の書／藤原定家書・古今和歌集／伊達本
Ⅱ 中央公論社『書道芸術』第16巻より

古典の発見——序にかえて

快活なる認識

私は、いつも自分をはてしない認識の旅を続ける永遠の放浪者であると思っている。そして、それは、偶然そうであるのではなくて、私の哲学者としての本性上そうであると思っている。

プラトンの饗宴篇によれば、哲学者、すなわち愛知者とは、美しいものがあると、ちょうど、男色者が美少年を求めるように、なりふりかまわず、おいまわし、それを永遠に所有しようとする人間をいう。だれよりもプラトンの師ソクラテスは、なりふりかまわず、美しきもの、真なるものを追いまわし、その報酬として死罪をえた愛知者であった。運命はソクラテスにとって、この上もなく苛酷であるように見えたが、彼の弟子たちは、死にゆくソクラテスに、この上もなく幸福な人を見た。苛酷な運命にもかかわらず、ソクラテスは、最後の最後まで快活であった。

ニーチェは、理性教の開祖としてのソクラテスを終生ののしりつづけたが、彼には、認識の性格づけにおいて、ソクラテスと共通な点がある。それは *la gaya scienza* ということである。*la gaya scienza* といえば快活なる認識ということである。認識することはたのしきことであると

いうことである。

la gaya scienza ということは、わが国の学界の常識にもとる。わが国の学界においては、いつも学者たちは、厳肅げに真理を語る。この真理は、多くは西洋から借りてきたかりものの真理であるが、厳肅な顔をして真理を売らないと、ひとびとは彼らが買うものが真理であることを信じないであらう。

私は、この厳肅なる真理の商売は、いささかいがわしいのではないかと思う。厳肅な顔は真理を真理として見せかけるのに有効でもあらうが、また虚偽を真理と見せかけるにも有効であらう。私は厳肅な顔をして、真理を売りつけようとしている偽善への嘔吐から哲学の道を始めたのである。

もしも、私の哲学者としての本質が、このような美しきもの、真なるものを求めての快活なる認識の旅を続けることにあるとすれば、この本は、そのような私が日本の古典という世界に気ままな旅に出たおりおりの旅行記といってよいであらう。

気楽な古典紀行

さいわいに、日本の古典は、たえずわれわれの近くにある。われわれは、いつもあまり努力せず、この古典の世界に旅をすることができる。もとより古典の文章は現在の日本語ではない。

しかし、やはり古典といっても日本の古典、日本人の書いたものである。少なくとも、日本語は

外国語より読みやすい。言葉が分りやすいばかりでなく、そこに存在している感情が分りやすいのである。こうした分りやすさも手伝って、私は、しばしば古典の世界に気楽な旅に出た。そして、その度ごとに、ある種の発見を私はした。発見というより経験といった方がよいかもしれぬ。ああこんなことが、この本に書かれていたのかと、今まで気のつかなかったことを、古典に発見して、おどろく。そのおどろきを書きとめたものを本にしたのが、この本である。

このような気楽な旅に私が出かけることができるのは、たぶん私が専門の国文学者ではないからであらう。専門の国文学者ならば、いろんなことが気になって、かくのごとく気楽な旅はできないであらう。専門家といえば、私はあらゆることに専門家ではない。国文学、歴史学、仏教哲学はもちろん、私が専門家とされている哲学においても私は専門家ではない。もしも、日本の哲学界の現状のように、哲学することであるのならば、私はそういう意味の専門家ではない。私についていえば、私は考えることにおいて、物を看^みることにいて専門家であり、一つのジャンルの研究に自己限定することにおいて専門家ではない。

仏教、歴史、文学、さまざまなジャンルに、私は気楽な旅をしたが、このような旅は、専門的な学者にとっては、はなはだ迷惑であらう。専門荒しはやめてほしいと、自己の専門領域を堅く守ろうとする真面目な学者はいうにちがいない。お前の学界荒しはなんのためか。海賊行為はやめておいてくれと、ひとはいうにちがいない。

たしかに、そのとおりである。海賊行為はよくないのである。私は、父方も、母方もともに海の生れであるが、たぶん、私の祖先は海賊であったにちがいない。海賊の血が、私の中ににえたぎっているにしても、なおかつそのような快活なる認識の旅——人はそれを快活なる海賊行為とよぶ——を続ける理論的根拠はどこにあるのかと人は問うであらう。

そのような問いに私ははっきり答えた、それは、在来の日本学の欠陥のためであると。従来の日本の古典の研究方法には、重大なる欠陥があったと私は思う。従来、日本についての学問には、日本歴史学と、日本文学とがあり、そして日本の古典はおもに日本文学作品として研究されてきた。

思想研究の欠如

文学と歴史、たしかに日本の文化を研究するには、そういう両面から研究する必要がある。しかし、もっと大切なものが忘れられてはいほしないか。それは思想、あるいは宗教の研究である。ところが、今の日本の学界ではこの日本の思想、あるいは宗教についての研究がおくれているというより、ほとんど存在していないのである。たとえば、日本のたいていの大学の文学部に日本文学および日本歴史の講座がある。この二つの講座のない大学は少ない。しかるに、日本思想、あるいは日本宗教の講座のある大学は、日本全国をさがして、一つか、二つにとどまる。これは実に奇妙なことである。日本には、歴史と文学はあるが、思想などというものはまったく存在し

ていなかったかのごとくである。

こういうことは、どだい日本自身を馬鹿にしたことなのである。あたかも、われら日本人は、歴史と文学はもっていたが、思想などというものはもっていなかったと、日本人自らが思っているかのようである。私が明治以来のナシヨナリズムというものを徹底的に信用しないのは、こういう自己卑下に、ほかならぬナシヨナリスト自らが、まったく気がついていないからである。

このごろ日本文化の研究のために、日本へ来る外人が多くなったが、彼らは、日本の大学に、日本の思想の講座がないことをふしぎがる。なぜ、空海や親鸞や仁斎じんさいや徂徠そらいを思想的に研究する講座がないのか。おそらく、自国にかんずるこういう講座をもたない古い文化をもっている国は日本だけであろう。新興国ならとにかく、古い文化をもった国が過去の自国の思想の研究に、真剣にとりくまないはずがない。

このようなことは、なぜ起ったのか。その原因の一つは明らかに、明治以来の西洋文化の移入の歴史にある。明治以来、われわれは西欧から科学技術文明をうけ入れた。そのさい、われわれにとって、ヨーロッパ思想が、ヨーロッパの理性万能の思想が全能であるように見えた。こういう全能の思想の前に、伝統的な日本の思想は、いずれも前近代的な、清算さるべき思想のように思われた。日本について誇示できるのは、その歴史と同時に文学であり、思想は学ぶ必要なしというのが、無意識のうちにかかる自己卑下を起さした原因であつたと思う。

そればかりではない。思想の研究は必然的に、あの明治百年日本を支配した天皇絶対主義の態

度と矛盾せざるをえない。明治百年を支配したナシヨナリズムなるものは、おどろくほど單純素朴なナシヨナリズムである。日本の思想の研究が、こういうナシヨナリズムにとつて、危険なものになる可能性は多い。いかに多くの、日本を研究した良心的な学者が、彼らの危険な思想のために失脚しなければならなかったか、思い出してみるがよい。しかもその失脚の原因となった思想などというものは現在から見ればなんでもないことなのである。

日本の思想研究を許さないことによつて、このような單純なるナシヨナリズムも無事でありえたのである。このようなナシヨナリズムの母体の一つが国学であるが、私はこのごろ国学なるものは、日本の文学や思想を、正しく解釈したというより、まちがつて解釈したという面が、かなり強いのではないかと思うようになった。

国学者の責任

ということとは、こういうことである。ものを認識するというのは、鏡がものをうつすようなものではない。ものを認識するには、認識する自己の方になにかなければならぬ。なにかがあるから、むこう側のなにかが分るのである。国学者がもし、古き日本のことを、従来より比較的に正しくかつ深く理解したとすれば、彼らは自分の方になにをもっていたか。彼らの中の、最大のイデオログである賀茂真淵^{かものもとみ}は、当時の学者たちが、さかんに、中国や印度のことを研究し、日本のことを研究しないのを慨嘆する。中国や印度の研究より、日本の研究を、それが、仏教や儒

教より国学へということになる。たしかに、ちょうど現在の日本の学者が、日本より、西洋のことの研究に熱心であるように、当時の学者たちは、日本より、中国や印度のこの研究に熱心であった。支那学、印度学にたいして、日本学は、あまりにも貧弱である。こういう状況において、彼らの批判は正しかった。外国学より日本学へ、かくして、契沖、真淵によって万葉集が、宣長によって古事記が、多くの日本人にとって、はじめて読むことができる古典となった。彼らの業績たるや、大したものである。

しかし、問題は、彼らの思想的立場がなんであったかということである。彼らは、中国や印度より日本をという。しかしそれは学問的認識の対象の問題である。しかし、それを理解する彼らの思想はなんであったか、このような問いを問うとき、彼らは大へん苦しくなると思う。

彼らの学問は一つの歴史的伝統の上にあった。いってみれば、仁斎、徂徠の、古学、古文辞学によって、中国の古典の文献的研究は当時の本国中国における研究にも負けないくらい、深くすすめられていた。その仁斎、徂徠の文献学的古典研究法を、日本の古典の研究に応用したところに彼らの研究の成果があった。それゆえ、私は、彼らの思想は、彼らが儒教に反対するにかかわらず、儒教的であったと思う。儒教的ということは合理主義的であるということである。彼らは合理主義的な眼をもって、日本の古典を見た。

そのもともともいぢるしい例を、私は契沖、真淵のほとんど完全といってよいくらいの柿本人麿の人生についての誤解に見るのである。柿本人麿についてここで語る暇を私はもたない。くわ

しくは、近く発刊の『水底の歌』(新潮社)を見てほしい。人麿は歌人であり、刑死したのであると私は思う。そして、契沖、真淵以前の人麿解釈には、そのようなことを暗示するような解釈がとられている。しかるに、合理主義的な彼らの眼は、人麿をおおっているという影にまったく気がつかない。そして契沖は、人麿を六位以下と規定し、真淵は掾と目の間の地方官とし、朝集使、税張使とした。人麿を六位以下に規定したのは契沖であり、掾と目の間の地方官朝集使、税張使に任命したのは真淵であるが、かわいそうにかつて「おおきみつのくらゐ」すなわち正三位とされた人麿が、契沖、真淵以後、六位以下の下級官僚、掾と目の間、朝集使、税張使ということになってしまったのである。

古来から、人麿について語られるとき、いつも彼は暗い死を、その背後に秘めている。人麿にかんしては、古来から、秘伝の形でのみ語られてきたのである。このような秘伝をまったく無視したことから国学は始まった。国学の立場は、はっきり文献合理主義の立場である。このような文献合理主義の立場が、あのような古典の精細な解釈を可能にした。それは彼ら国学者の大業績である。しかし、その大業績が、その裏に、大犯罪を秘めていると私は思う。古くから、人麿の像が背負ってきた暗い影は、かくして、まったく消失してしまった。真淵は、人麿の中に小心翼翼、唯々諾々として権力者の意に従う小役人を見たのである。

このような誤解について、ここで私はくわしく語ることができない。ただここではこのことだけ指摘するにとどめよう。国学が、無意識のうちにこのような合理主義を根柢として、日本の古

典を理解したとしたら、彼らは、自己の思想的立場を誇示することができなかったのは当然である。いったい仏教や儒教に反対する彼らが、日本の古典に、どのようなすぐれた思想を見たのか。

あやまった古代のイメージ

そこで、出現するのが、明^{あか}き、直^なき、浄^{きよ}き心をもった古代日本人というイメージである。この明^{あか}き、直^なき、浄^{きよ}き心というのは、律令国家が日本人民に課した厳しい道徳であると思う。明^{あか}き、直^なき、浄^{きよ}き心、こういう心を人民にもたせることによって、律令政府も日本人民を積極的に支配しようとしたのである。なぜなら人民がそのような心をもてば、権力者は、人民の心をすみのすみまで見ることができ、したがって、人民の操縦が容易になるからである。

真淵は、このような明^{あか}き、直^なき、浄^{きよ}き心が、日本の古典、記紀や祝詞にとかれているのを見た。明^{あか}き、直^なき、浄^{きよ}き心こそ、それらの古典の理^{ことわり}であると彼は考えた。その点彼は正しかったが、まちがったのは彼が、それが悠久の昔から日本を支配し、永久に支配しつづける日本精神の本質であると考えた点である。かくて暗く邪惡で濁った中世にたいして、明^{あか}き、直^なき、浄^{きよ}き古代というイメージが可能になるが、この中世というのは、仏教や儒教の影響によって、つまり唐^{から}心の影響によって生じると彼は考えた。

真淵のこのような考えをほぼそのまま、宣長は、その古典解釈においてうけついたのである。

彼は古典の解釈者として真淵以上である。私は国学者の中で、契沖と宣長を一級の学者と思うが、宣長は真淵のように単純な合理主義者でなく、非合理なものを大切にする。たとえ、古事記において認識できないことがあっても、それは古事記の方にその責任があるのではなく、われわれの理性の方にある。つまりわれわれの理性は神の言葉を完全に理解するにはあまりに不完全なので、理解できないことがあっても、それはわれわれの理性の不完全さのせいであるという態度をとる。このような非合理なものへの尊重は、宣長から篤胤へ進むといっそう強くなるが、にもかかわらず、彼らの古代観はあまりに素朴すぎると思うのである。日本の古代人は、彼らが考えるように、明くも、直くも、淨くもなかった。いつてみれば、日本の古代人はその思想において、彼ら国学者より、はるかに複雑で、はるかに高等であった。明く、直く、淨き古代などというのは、彼ら儒教的ロマン主義者のえがいた、あまりに単純なる幻影にほかならなかったのである。

宣長は、思想の古典として、なによりも古事記を重んじたが、文学の古典として彼らが重んじるのは、源氏物語と新古今集であった。そしてこの場合、彼は源氏物語、および新古今集を思想としてではなく、単なる文学として重んじたのである。源氏物語、新古今集は、あきらかに仏教の全盛時代の文化的産物である。そしてその中には、あきらかに、仏教の影響が認められる。極言すれば、仏教の影響を考えずに、それらの文学は理解できないといってもよい。源氏物語における密教および浄土教の影響、新古今集における天台止観の影響、これらの影響なしには、これ